

女性局web会議 新型コロナウイルスに関する勉強会



三原じゅん子女性局長

女性局は、3月27日に18府県連の女性局とテレビ電話をつなぎ、web会議を開催。

前女性局長代理で現在は厚生労働大臣政務官の

自見はなこ参議院議員を招き、勉強会を開きました。

女性局より

18府県連に向けて

女性局web会議では初めに、三原じゅん子女性局長が、青年局と共同で都道府県連各組織を

対象に実施した「新型コロナウイルス

感染拡大に関する緊急ア

ンケート」について、全国から

の回答をとりまとめ、岸田文雄

政務調査会長に手交したことを

報告。そして「新型コロナウイルス

で大変な時期を迎えています

。厚生労働大臣政務官を務め

る自見はなこ参議院議員は、同

省対策本部の一員として、感染

者が多く出たクルーズ船「ダイ

ヤモンド・プリンセス号」に乗

りました。現場の様子を伺いながら、私たちが気を付けるべきことを学び、この危機を共に乗り越えていきたいと思えます」と話しました。

続いて、とかしきなおみ女性局長が女性未来塾特別講座女性候補者育成コース開設について説明。さらに、堀内詔子女性局長代理が衆議院静岡4区補欠選挙に言及し、深澤陽一公認候補への支援を呼び掛けました。

新型コロナウイルスに

ついて講演

その後、自見はなこ参議院議員が「新型コロナウイルスについて」と題し、講演を行いました



た。新型コロナウイルスは人類がまだ経験したことのない新興感染症とした上で、その特徴を「感染しても約8割の方が無症状または軽症で、呼吸苦症状が出た人のごく一部が重症化する」といわれます。高齢者や基礎疾患のある人は要注意。また、感染してから5〜7日ほどで、症状が急激に悪化する場合があります」と説明しました。ウイルスによる感染症はほとんどの場合で根本療法がなく、自分の免疫で打ち勝つまでの間、対症療法を行うこととなります。

感染症が国際的に流行する時、初めに重要となるのは水際対策。入国拒否や検疫強化を行い、ウイルスが国内に入らないように努めます。「例えばアフリカで流行したエボラ出血熱は、最も危険な1類に指定された感染症。致死率が約5割と高く、現地で亡くなる人が多いため、ウイルスは日本まで到達しませんでした。今回の新型コロナウイルスは2類相当とされる感染症で、1類に比べて軽症で終わる人が少なくありません。だからこそ、

感染が広く世界中に拡大しやすいのです」と解説しました。

水際対策の最前線となったダイヤモンド・プリンセス号には、乗客約2700人、乗員約1000人が乗っていました。「国際法でも国内法でも、どこの国が責任を持って感染症対策を行うか、明確な決まりはありません。ですから、実は日本もこの船の入港を断ることができました。しかし、すでに症状の出ている人がいて、日本人もたくさん乗っていました。乗員の命が懸かっていましたから、人道的な観点からも、入港を受け入れると腹を決めたわけです」。

総力戦で当たった水際対策

船内はビュッフェスタイルのレストランやダンスホール、SPAなどもあり、人々が密空間で濃厚接触する機会が豊富にある環境。さらに乗客は高齢者が多く、高血圧や糖尿病など、何らかの基礎疾患で日頃から薬を飲んでいる人も2000人近く



ダイヤモンド・プリンセス号での対応について語る
厚生労働大臣政務官の自見はなこ参議院議員

いました。「私たちは、感染がすでに船内で広がっているだろうという予測のもとで、対応を始めました」と振り返りました。

この時、中国・武漢^{ぶかん}からチャーター便で帰国した人たちに対応するために、日本感染症学会や日本環境感染学会、大学医局の医師たちのチームが編成されていました。このチームをそのままダイヤモンド・プリンセス号に配置。船内には早い段階から、検疫官も含めた感染症専門家がいちいちです。「チームの先

生方のお力を借り、ゾーニング（区分）などにも指導をいただきながら対応しましたが、やはり船は病院ではありません。室内の空気を閉じ込める陰圧室もない環境で、毎日毎日改善しながら、できることをやりました」。

水際対策と同様に、乗船者の命を守ることも重要です。船内には54カ国の人々が乗っていて、外国人対応の難しさもありました。検査で陽性と出た人に結果を伝え、早急に荷物をまとめる

よう指示しなければなりません。夫婦で仲良く旅行を楽しんでいたのに、言葉の通じない異国で突然新興感染症だと告知され、慌ただしく夫婦が引き離されました。「命に関わることもある感染症だともみんな知っているの

で、とても心細かったですと思います。家族で旅行していて、小さな女の子だけ陽性と言われ、お母さんが泣き叫びながら裸足で船内を駆け回る姿を見るにつけ、厚生労働省の職員や私たちが対策本部のメンバー

にとっても大変つらく、涙が抑えられなくなったり、多弁になつたり。大きな心の負担となりました」。

船内に残された家族の心のケアは、「DPAT^{ダイヤモンド}」や「リエゾンチーム」という精神科医療のスペシャリストが担当。災害派



遣医療チーム「DMAT^{ダイヤモンド}」は、告知や船内で症状が悪化した人の治療、搬送などに携わりました。また日本医師会の医師団「JMAT^{ジェイマット}」の医師たちは乗員・乗客全ての健康チェックなどの問診活動を行いました。「自衛隊の衛生部隊には検体採取をし

ていただき、感謝しています。陽性の人の入院場所は、北関東から関西までかなり広範囲に及びました。その搬送をしたのも自衛隊です。長時間防護服を着たままなので、本当に大変だったと思います。その他、民間救急の皆さま、外務省の各地域の担当者、在日大使館スタッフなどの協力も仰ぎ、まさに総力を挙げて対応に当たりました」。

乗客が下船した後に…

本来ならば1000人の乗員も検疫対象者ですが、初めの14日間は乗客2700人の検疫を優先して、乗員には3700人分の食事や洗濯など、生活を支える活動に献身的にあたっていただきました。船は食中毒に気を付けなければならぬので、



堀内詔子女性局長代理

元々衛生管理が徹底しています。しかし今回、乗員たちはさらに衛生セミナーを受け、離れたところで食事し、手洗いの監視を付けるなど、厳しい衛生管理をしました。「毎日3〜4回、キヤプテンが船内アナウンスで呼び掛けていました。お客様に正確な情報を伝えると同時に、頑張ってくれている乗員に励ましの言葉があり、私たちも支えられました」。そして乗客が降りた日から14日間、乗員の検疫が始まります。「とても壮絶な経験だったので、乗員たちが母国に帰り、最後にキヤプテンを送り出した時は、涙が止まりませんでした」。



古川 康女性局長

ちも含めて、しっかり保健所で追っているのです、そこから新たな集団感染は発生していません。膨大な予算、人、医療的資源を投入しましたが、広い意味で水際対策は行えていると、ご理解いただきたいと思います」。

その後、自見参議院議員たちも宿泊施設に入り、14日間の検疫を受けました。数日後、アメリカ西海岸にいた別のクルーズ船で新型コロナウイルス感染症が発生したとニュースが入ってきたので、アメリカの関係機関と即座に電話会議を行い、情報提供しました。「ダイヤモンド・プリンセス号での経験は、今後国内で局所的な流行が起きた時の対策そのもの。国の財産というべき貴重な経験となりました。とにかく大流行に備えなければなりません。イタリヤやスペインの状況は、決して他人事ではない。医療崩壊という最悪の事態を想定し、危機管理を行っています」。

「私の事務所の秘書は、手縫いの布マスクを作り始めています。サージカルマスクは医療従事者にお渡ししたいので、皆さまもご協力をお願いします」と呼び掛けました。

テレビ電話で

双方向にやり取り

その後の質疑応答では、「ウイルスの変異について」「小中学校の再開に向けて、子供たちを守る方法」などの質問の他、「自治体の備えのために、予算を出してほしい」「保育所にマスクを回してほしい」などの要望も出ました。また反対に、古川^{かわがき}康女性局長が各府県連に向け「府県連女性局の活動として、マスクを手作りすることはできませんか」と質問。これに対し「今後積極的に取り組みたい」との返答の他、もうすでに始めていた富山県連は、画面越しに手作りのマスクをアピールしました。双方向で、活発に意見交換ができたweb会議となりました。